

第 22 回「孔子像（二）」

孔子の精神とその生活と。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第 22 回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

今回は「孔子像」第二回をお話しします。

まずは読みましょう。

「子曰く、^{しいわ}位^{くらいな}無^{うれ}きを患^たえず。立^{ゆえん}つ所以^{うれ}を患^{おのれ}う。己^しを知る^な莫^{うれ}きを患^{うれ}えず。

知る^し可^べきを為^なさん^{もと}ことを求^{もと}む」(里仁第四)

ちょっと難しい感じの文章ですが、中身はそんなに難しいことを言っているわけではありません。

「子曰く」これは何度も出てきましたように、孔子がこのように教えた、ということです。

「位無きを患えず」この場合の位は、何か働きを与えられた時の地位というような意味です。何かをする場合に、それ相応の地位がなければ、できません。それで、自分としては何か、そういうことをできる位がほしいと思っている。

しかし活躍できる地位が無いといって、そんなことで心配するな、気を落とすことはない、という意味です。

前回も申しましたように、孔子は不遇の時期の方が長かった。自分が活躍できる場所、そういうことについて敏感でした。だから逆に、活躍できる地位がないからと不満を漏らすようなことがあってはならない。と言いつけた一生でした。

自分が活躍できる地位にないことで心配をするな。むしろ逆に、「立つ所以を患う」所以というのは、理由です。自分が世に出るだけの理由があるかどうか、「患う」反省するというくらいでしょうか。

誰も自分を認めてくれない、そんなことを言う暇があったら、お前が本当にそれだけの価値がある人間かどうか、反省しろ、そういうことを言っているわけです。自分の不遇に対して、自分を戒める。

「己を知る莫きを患えず」

誰かが自分を認めてくれないとあって、気にするな。

「知る可きを為さんことを求む」

自分以外の、優れている人を知るべきではないか。他者の優れている点を認めるということ
自ら求めるべきである。

つまり、自分が認められないからと言って、不平を言うのではなくて、己を鍛えよ。

そして、他の人の優れた才能、そういう人について、もっとよく知るべきだということです。

次の文です。

「子曰く、^{しいわ}疏食を^{そし}飯らい、^く水を^{みず}飲み、^の肱を^{ひじ}曲げて^ま之を^{これ}枕とす。^{まくら}楽しみ亦^{たの}其の中^{またそ}に在り。^{なか}あり。

^{ふぎ}不義にして^と富み且つ^か貴きは、^{たつと}我に^{われ}於いては^お浮雲^{ふうん}の如し^{ごと}」(述而第七)

孔子のことばです。これは人から認められないときの在り方を言っています。

「疏食を飯らい」

「そしょく」と読まずに「そし」と読みます。粗食のことです。非常に粗末な食事です。飲むものといっても水くらいです。

「肱を曲げて之を枕とす」

そして、寝るところと言ったら、そんな立派なところではなく、そのあたりに転がって、肘を枕にして寝るような、非常に簡単な貧しい生活。それでいいじゃないか、と。

「楽しみ亦其の中に在り」

人生における楽しみというものは、むしろ質素な中にあるのだということを言っています。

これも不遇だった孔子が、自分の身について決して嘆かずに、そういう人生もいいじゃないか、と思ったのでしょう。

そこで、次の大事なことばです。

「不義にして富み且つ貴きは、我に於いては浮雲の如し」

正しくない方法で富や地位を得たりする、そういう人間ではない在り方、そんなものは、私にとっては、浮雲の様なものだ。浮雲とは、自分たち人間の生活とは関係のない、つまらないものという意味です。

浮雲と言いますと、我々には、少し詩的なイメージがありますが、「浮雲」は空に浮かぶ、つまらないもの、役に立たないものという意味です。

日本では、「雲上人」という言い方があります。自分とはかけ離れた大変貴い方、という意味で、日本語では使いますが、中国で言うところの雲は、役に立たない、つまらないものという意味になります。「雲上人」もつまらない人という、日本語とはまったく逆の意味になります。覚えておかれるといいでしょう。

次にいきましょう。これは続きの様なことばです。

「子曰く、賢なるかな回や。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は其の憂いに堪えず。

回や其の楽しみを改めず。賢なるかな回や」(雍也第六)

「回」というのは、顔回という人物のことです。

これは、私の推測ですが、孔子のおかあさんの親戚筋ではなかったかと、思っています。おかあさんは祈禱師であり、雨乞いなどもしておりました。おかあさんは「顔」という姓でした。顔回はどうも親戚の子どもだったのではないかと思います。

そばにいると気が休まる、そういった人物だったようです。ですから、孔子は顔回を、常にそばにおいて、愛しておりました。その顔回に対して、孔子はこうっております。

「賢なるかな回や」

ああ、立派だな、と。

「一箠の食、一瓢の飲、陋巷に在り」

「箠」、竹を割って弁当箱にしている。粗末な弁当だったのでしょ。

「瓢」これはひょうたん。飲み物を入れている。たぶん水でしょ。

「陋巷に在り」 貧しい家に居る。「陋巷」は地名という説もありますが、

ここは素直に、貧しい家が並んでいるところとしましょう。

「人は其の憂いに堪えず」

普通の人ならば、そのような生活に耐えられない。



瓢箠（ひょうたん）

ところが、「回や其の楽しみを改めず」

顔回はその楽しみを変えない。貧しい生活の中で楽しんでいるじゃないか。

そして、もう一度。「賢なるかな回や」ふたたび褒めています。

孔子は顔回を愛していたようですが、顔回は亡くなるのです。

このときの孔子の嘆きのことばが『論語』にいくつも残っています。本当に悲しみ嘆いていることばです。

次にいきます。

「子曰く、由、女に之を知るを誨えんか。之を知るは之を知ると為し、

知らざるは知らずと為す。是れ知るなり」(為政第二)

「由」は、子路という人物の名前です。中国人は本名と^{あざな}字と、二つの名前を持っています。

子路は、孔子の若い時からの弟子ですから、本当に親しい。

「子曰く、由、女に之を知るを誨えんか」

由よ、と呼びかけています。お前に知るということを教えてやろう。知るとはどういうことかを教えてやろう、と言っています。

「之を知るは之を知ると為し、知らざるは知らずと為す」

「之を」は形式目的語ですから、「知るは知ると為し」としましょう。知っていることは知っている。わからないことはわからないとする。

知っていることは知っている、知らないことは知らないと、率直に言う。これが本当の「知る」ということなんだ。知らないことを知ったかぶりするような態度はだめだと言いました。

これは、ヨーロッパのソクラテスの「^{むち}無^ち知の知」ということばと似ているとよく言われます。ソクラテスも、知らないということを知っている。これが本当の知だと言っています。



子路は屈強な身体つきをしていて、勉強はあまり好きではなかったようです。その子路が何か悩んでいたのでしょうか。孔子はそんな子路に対して、知らないのなら知らないでいいのだ、と教えたのだと思われています。

その次です。これも有名なことばです。

「^{しいわ}子曰く、^{これ}之を^{いかん}如何せん、^{これ}之を^{いかん}如何せん^いと^{もの}曰わ^{われ}ざる^{これ}者は、^い吾^い之^いを^い如何^いとも^なする^な末^なきのみ」
(衛霊公第十五)

「之を如何せん、之を如何せん」わざと同じことばを二回言って、強めています。

これをどういうふうにするにすればいいのですか、どうすればいいのですか、と積極的に問いかけて

こない者に対しては、「吾之を如何ともする末きのみ」どうしようもない、と言っています。

弟子側の方から、どうすればいいのですか、これはどういう意味ですか、と積極的に問いかけてくる者以外には、教えても意味はない。

自分から、何かを知りたい、教えてほしいという気持ちがあったときにこそ、それに対して答えることができるのだと、孔子は言っています。

このように孔子は弟子達に対し、それぞれに合わせた教え方をしていました。

このことばは誰に向かって言ったのか、わかりませんが、ただ学校に来て、だらしなく過ごしている弟子も多かったでしょう。本当にやる気があってこそ、学ぶことができるのだと、孔子は